

文部時報

昭和五十六年十月
第一二五三号

特集 現代の博物館

生涯教育と地方博物館

平山敏治郎 4

▽座談会

博物館を語る——その現状と展望——

8

(出席者) 千地 万造・嘉門 安雄・下津谷達男

青木 国夫・(司会) 五十嵐耕一

我が国の博物館活動

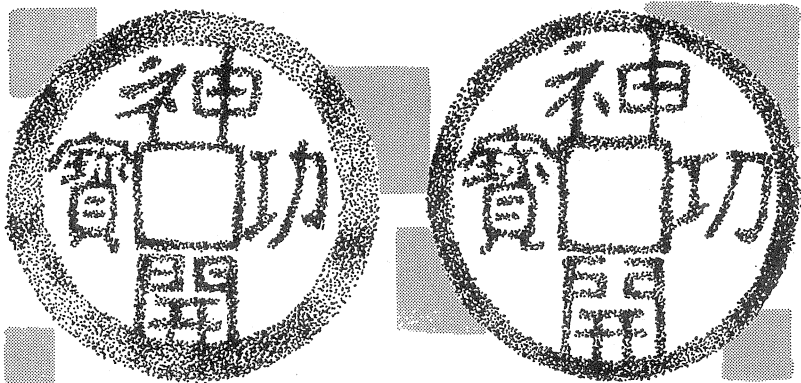
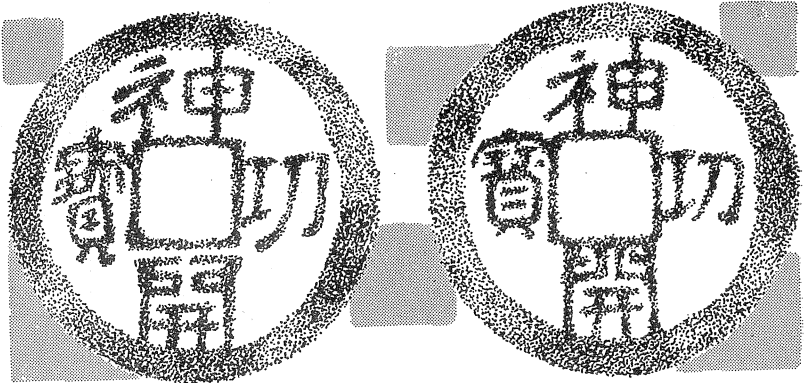
毛利 正夫 24

海外諸国の博物館

伊藤 俊夫 31

●報告と提案

博物館と学校サービス(平塚市博物館:37)/博物館と郷土理解(秋田県立博物館:40)/博物館の館外サービス(沖縄県立博物館:45)/博物館の交流(大原美術館:48)



▽解説・資料

統計でみる我が国の博物館

社会教育局社会教育課 53

▽現地ルポ

上野の山の博物館巡り

山本 清 63

随想

わたくしと動物園

古賀 忠道 68

▽研究報告

国民性と国際比較

林 知己夫 70

中学・高校生の数学の成績

沢田 利夫 78

連載第2回

唱歌のあゆみ

明治における唱歌教育三つの道標

大和 淳二 93

●文部省のまど

大学通信教育の基準に関する

大学設置審議会の答申について

大学局高等教育計画課 83

昭和五十六年度

学校基本調査速報:大臣官房調査統計課 88

●海外教育ニュース:大臣官房調査統計課 91

オルタナティブ・スクールは生き残るか?

・企業への教育投資状況(アメリカ合衆国)/八

○年代前半の連邦の教育政策(西ドイツ)

●昭和五十七年度科学研究費補助

金「研究成果刊行費」申請計

画の公募について 学術国際局情報図書課 30

文化財紹介●大内宿伝統的建造物群保存地区 (天田起雄)

名作シリーズ●東武画像 (解説) 小林 忠 52

■次号目次 表紙 藤沼和枝 カット 赤羽根秀一 96

●座談会

博物館を語る

——その現状と展望——

出席者

千地 万造

敬称略

(大阪市立自然史博物館長)

嘉門 安雄

(ブリヂストン美術館館長)

発言順

下津谷達男

(野田市郷土博物館長)

青木 国夫

(国立科学博物館工学研究部長)

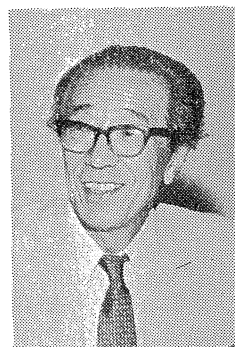
五十嵐耕一

(文部省社会教育局社会教育課長)

△司会△



千地 万造氏



嘉門 安雄氏

高まる博物館設置の気運

五十嵐(司会) 本日はお忙しいところをお集りいただきまして、大変ありがとうございます。最近、博物館設置の気運が非常に高

まっております、どの県へ行きましたが博物館が既に設置されていたり、あるいは計画が進行中であり、市につきましても、そういうところが相当増えている現状にあります。また、博物館に来館する人々の動向を見ておりましても、従来とはやや違ってきて、幅広い層の方々が来館されているように見受けられ、その点からも、国民の多様な文化的活動の一端として博物館の利用が増大してきているのではないかと思います。

そこで、本日はそれぞれの博物館の責任者として、日ごろ博物館運営にご努力をいただいております先生方にお集まりいただき、いろいろとお話を伺わせていただきたいと思います。

お話に入る前に、私の方から最近の傾向を若干述べさせていただきますと、近年、「地方の時代」あるいは「文化の時代」ということがよく言われており、またこの六月には、中央教育審議会から「生涯教育について」の答申が行われました。このような動きを背景としまして、先ほど述べましたように、博物館、図書館、その他の社会教育施設に対する関心が非常に高まってきたのではないかと、思うわけです。統計数値から見ましても、例えば登録博物館の数は、昭和五五年度には三五四に達しております。これを五〇年度と比較してみますと、一三四館増加しているという状況にあるわけです。

このように、地方公共団体における博物館

設置の気運、あるいは私立のいろいろな形態での博物館設置の気運の高まりには、多様な背景があると思われますが、まず公立の博物館の責任者でいらっしゃる千地先生は、この点をどのようにご覧になっておいででしょうか。

千地 昔は、博物館といいますが、直ちに教育施設というように、非常に堅苦しく考えられる面が強かったようです。しかし、最近の人たちの考え方を聞いてみますと、もっと幅の広い、文化的な施設という受け取り方をしているようです。また、行政の立場からみても、近ごろの地方行政は文化なしでは語れなくなってきたので、博物館を始めとして文化的なものを大切にする気運が非常



下津谷達男氏



青木 国夫氏



五十嵐社会教育課長

に高まってきていると言えます。

そのような中で、それでは文化施設として何が一番適当であろうかということを考えますと、やはり博物館、あるいはその一分野である美術館というものが頭に浮かんでくるわけです。

それから、戦後の日本の経済成長の中で文化、政治、経済の全てが東京を中心として集中してきたと思うのですが、それが反省の時期に当たって、地方の文化を育て上げたいという気運も出てきている。そのような要素が絡み合って、地方自治体ではまず文化行政と言えば、地域の博物館、美術館の設置ということが発想として出てくるのではないのでしょうか。

五十嵐 最近では、私立でもなかなかよい施設ができておまして、新聞その他でもずい分取り上げられております。例えば「ひろしま美術館」のように、企業自体が社会に還元するという意味から美術館をつくっていく、というような動きもあるのですが、嘉門先生はこれをどのようにお考えになっておりますか。

嘉門 公立についてお話があったのと同様

に、私立についても結局バックグラウンドをなすものは同じ要素でしょう。また、国全体が豊かになり、文化性を求めているということが言えるのではないのでしょうか。ただ、私立の美術館なり博物館が、内容的に充実しているということ、そして同様なものがどんなにできていくということについて申し上げますと、大体私立の場合には、資料収集に当たるのは個人です。つまり、オーナーが好きだからこそ集めるわけです。しかし、集めた方が亡くなられますと、現在の税法などの関係から結局分散せざるを得なくなる。ところが、せっかく集めたものを、できれば一括して保存したいという気持が出てくるので、そのために少し無理をしてまで博物館にするという傾向もあります。

とにかく私立の場合には、物があるから博物館をつくります。ところが、大変失礼な言い方かも知れませんが、公立の場合には建物というシンボルをつくってから物を集めることになるわけです。そのへんに違いがあると思います。例に出された「ひろしま美術館」にしてもそうですが、あれは企業というよりも、企業のトップの方が精力的に集められ

て、それを社会還元という意味で博物館にしている。そのようなケースが非常に多いと言えます。

下津谷 公立の美術館の推移を統計で調べていきますと、昔は公立は非常に少なかった。それが最近になって、公立の美術館というものが作られるようになってきています。それと比較しますと、私立は昔から今もそれほど変わらないペースで増え続けています。建物も立派ですし、内容も充実しているところが多い。ですから、私は一時期、美術館には公立という性格が合わないのではないかと考えたこともあります。要するに、公の施設で、公が運営するということは、何となくなじまないような気がしていたわけです。

青木 それは、東京都の場合に大変はつきりした形で出ているのではないですか。例えば、東京都美術館はギャラリーで貸館方式です。このような形は、公立でなければ成り立たない。ところが、最近の各都道府県でつくる美術館というのは、ギャラリーではなく、何か常設の展示がなければ困るという形でつくりますから、館蔵資料が少ないということもあり、そこに多少背伸びをしている面が出て

てきているように感じます。

嘉門 それは、美術館に限らず博物館は常設展示を持っていることが本道であるということ、皆さんがはつきり意識してきたという背景があるのではないのでしょうか。ですから、今おっしゃったような無理も出てきます。博物館は、いつでも催し物、特別展をしているものという考え方は、徐々に減ってきておられますね。ただし、現状はなかなかそうはいきません。例えば、私の美術館では常設展示を守っておりますと、よく電話が来ます。「今、何をやっていますか。」と尋ねられ

るので、「うちは常設展示です。」と答えますと、時々「怠け者だね。」と捨てぜりふを聞かされることがあります。(笑)

最近では、本来、常設展示の道を手本として守ってくれるべきはずの国立までが、年一度か二度は特別展を開催される。国民の方々いろいろな作品を鑑賞する機会を提供するという意味からは高く評価しますが、それに博物館活動のメインのような空気があるとすれば、これはだんだん是正されていくと思います。また是正しなければいけないことです。

それから、地方自治体でどんな博物館をつくるということは、一つには、いい意味でも悪い意味でも「流行」ということがある。隣の県でつくったので我が県にも、という意識が働くようです。しかし、その場合には、どうしてもシンボルとしての建物が優先してしまい、博物館の体をなす資料の収集が不十分なまま開館してしまふ。資料というものは一朝一夕に集められるものではありませんので、結局、特に美術館の場合などは、いわゆる「目玉」を集めよう、購入しようという考え方が先行してしましますね。

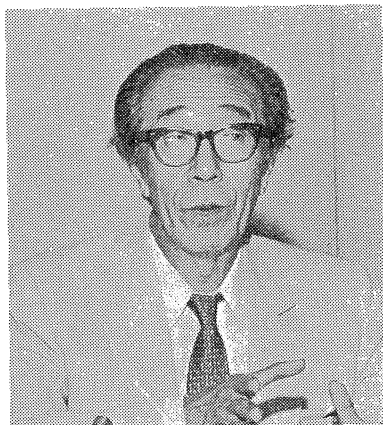
千地 ですから、目玉を作ろうとしますと、ずい分無理をしなければいけませんね。私もヨーロッパへ行って、美術館などを見ましたけれど、あのへんには、それこそ目玉がたくさん集められていて、今さら、例えば印象派の名画を集めようとしても、目玉になるようなものは大変少なくなっています。むしろ、残っていないと言ってもいいかも知れません。

博物館と地域性

五十嵐 ただ今、美術館中心のお話になっているわけですが、いわゆる建物中心というご批判もあり、各県でもかなりその点を反省して、いろいろ努力しているようです。そこで、博物館が立地するそれぞれの地域とどのような結びついていけばよいのか、ということがあると思うのですが、このような点については、いかがでしょうか。

下津谷 北海道を例にとりますと、郷土資料館などを含めて、博物館や博物館的な施設





がほとんどつくられています。これは、最近、特にめざましい傾向です。数字で見ますと、「全国博物館総覧」では公立一〇五館に対して私立一四館というように、そのほとんどは公立で、内容的にもかなりのものが歴史系統の博物館です。

北海道のように、ある意味では歴史が比較的浅く、自分たちの先祖をまだ十分に覚えていた人たちが多い、という地域にあっては生活が安定するにつれて、そのような施設をつくらうと計画しますと、そのほとんどが歴史に焦点を当てるといえることになる。と言えるか

も知れません。つまり、先祖をしのぶとか、あるいはその苦勞を残しておこう、ということなのです。このように、歴史系統や民俗系統の博物館が、最近非常に多くなってきたということには、そのような人々の考え方がバックにあるのだと思いますね。

千地 自然科学系統の博物館の場合には、そのような地域性というのはいささか薄くなり、普遍性が出てきます。しかし、自然史系の博物館ということになりますと、やはり地域性というものがあります。私は博物館というものは、地域的に特色のあるものでなければならぬと思うのですが、それをあまりにも字面だけで解釈してしまいますと、例えば展示品の中で、「何々県の鳥」とか「何々県の植物」というような展示ばかりになってしまふ。そうすると、その地域の特性が逆に全然浮き上がってこないということになります。

ですから、日本の中、あるいは東アジアというひろがりの中で、この地域にはこのような特色があるのだということが認識できる展示をしなければいけません。現状では、どうも自分の行政区画の中だけのことしか念頭に

ないような、片寄った地域性の強調が感じられます。

嘉門 確かに自然史系の博物館や理工系の博物館などは、あまりにも地域性にこだわっている、意味をなさなくなる面があります。

そこで私は、いわゆる歴史系の博物館や美術系の博物館は、むしろ公立や私立が中心になるべきであり、理工系とか自然史系の博物館は国立が中心になって、もっと大きく育てていかなければならないと考えております。

青木 おっしゃるような面も確かにあります。私は理工系の博物館については、まだ共通の理解が比較的小さいように思います。大ざっぱに言いますと、理工系の博物館の展示は、原理的な諸現象を解説する部分と、もう一つは、産業技術史的な、いわゆる科学技術の発達資料という部分に分けられる、という考えを持っています。

産業技術の発達資料については、やや地域性の要素を持ったものがあります。例えば、ある地方で製薬関係の産業が発達していたとすると、その関係の資料を集める。そうすると当然、自然科学的原理もその中で解説す



備が進み、歴史博物館や美術館がたくさんつくられているのですが、理工系博物館は未だ少ないのが現状ですね。ただ、望みがないわけではありません。最近、自然科学を中心に、地域の自然、民俗などを含んだような博物館をつくらうという動きも出てきましたので、今まで少し遅れていただけで、今後はもっと活発な動きとなって表われてくるだろうという希望は持っております。

下津谷 そのような動きが出てきたことは、結局、地方自治体にしても国にしても、政治にたずさわる人たちが自身が、そのようなものをとにかく持たなければいけない、という考え方にだんだんなってきたというところによるのです。殊に、地方自治体は、先ほども少しお話に出ましたように、隣がつかればうちもという、これは非常に単純な発想ですけれど。しかし、それ以上に文化を大切にする気運が高まり、本来利益優先の企業もそれを重視し、その社会還元ともいえるべき形で博物館設置をしつつあります。これは、もとより一般の人たちもそれを要望している。それに対して、何とか対処していかねければならないという考え方が強くなり、あち

ちこちらで博物館がつくれる要因となっているのではないかと、思います。嘉門 一つの例ですけど、北陸の小さな町で郷土資料を収集して、その資料館を町役場の中につくったところがあります。これが非常に効果的だと言われています。それはなぜかと言うと、市役所へ行ったり、町役場へ行くということを、何となくためらったり、おっくうがたりするわけですが、ここの例ですと役場へ行ったその足で資料館に寄れるわけですね。そうすると、自分の郷土や、あるいは先祖を改めて意識するし、むしろ役場へ足を運ぶことが一つの楽しみにさえなってくる。資料自体は特色があるものとは言えませんが、この例を見たときに、私は、これから各地方自治体でつくられる資料館、歴史館等の一つの典型ではないかと思ひ、非常に感じました。

資料の収集と方法

五十嵐 先ほどのお話の中にも出ておりま

したが、資料の収集・保管ということを考えたときに、美術資料の場合などには、一つは特定の好事家、あるいは財力のある方が一代をかけてコレクションしたものが、美術館に発展していくというケースがある。もう一つは、入れ物をつくる地方公共団体と、個人のコレクションとをうまく結びつけていく、というようなケースも出てきているのではないかと思います。

例えば、岡山市立オリエント美術館は安原真二郎さんのオリエント関係のコレクションを中心につくられたものですし、福岡市立美



術館の場合にも、松永安左衛門さんのコレクションをいただいたり、黒田家のものの寄贈を受けたりしている。よい入れ物をつくることによって、逆にいろいろなコレクションが集まってくる、という面もあるのですが、そのような点について嘉門先生はいかがお考えでしょうか。

嘉門 はい、おっしゃる通りだと思いますが、そこにも税金問題というネックがあります。公立が買うにしても、必ずしも無税ではありません。逆に言えば、今日のような仕組みですと、皆さんが国立や公立に納めたいというのが自然でして、そうなると今度は、私立の方が資料を非常に手に入れることになる、ということにもなる。国立の方は、重要文化財はもとより、重要文化財相当品と認めると無税ですね。そこで、公立とか我々私立の登録博物館は、せめてそのような措置を認めてほしいということで、毎年陳情しているのですが、贈与税とかいろいろな税金関係の問題が、一つのネックになっているのが実態です。

五十嵐 税制上の問題は確かにありまして、私どももいろいろ関係方面にお願いをし

ているのですが、このような時代ですからなかなか難しい面があります。しかし、今後とも努力していきたいと思っております。

嘉門 それから、私はアメリカの美術館などを見て羨しいことは、寄贈者の名前がはっきり掲げられていることですね。そして、その絵の前では、その絵を寄付したおばあさんなどが、これはハズバンドと一緒にヨーロッパ旅行をしたときに買ったもので、その後この美術館に寄付したのだということを、友だちに対して、それこそ得意満面で説明している。寄付したということが、実に自慢のたねになるわけです。日本の場合ですと、このようなメリットを楽しむということは、なかなかありませんね。

青木 おっしゃる通り、今までの博物館は、何かを寄贈された場合の対応の仕方というものが、大変下手だった。

これもアメリカの例になります。例えば、フランクリン科学博物館へ入りますと、ホールわきに「○○ミュージアム」と彫られた銅板がたくさん並んでおります。そんなにたくさんミュージアムがあるのかと思つて見ると、ミュージアムというのは、実は個人が

寄贈したコレクションを指しているわけですね。このようなやり方を、我々もしなければならぬのではないかと思います。どうもそのへんが下手ですね。

千地 特にそれは、公立の場合に下手ですね。私などは、公立の博物館であっても、もしその博物館一館を丸々寄付したという人がいたとすれば、その人の名前を頭につけて、例えば、東京大学の安田講堂と同じように、だれそれ博物館とつけたらいいと思っております。ところが、公立の場合には、そのようなことはあまりしたがない。



嘉門 確かにしませんし、まだできないような状態でもありますね。うっかり名前を出されると困るということが、いろいろな面において出てくる。(笑)

これは、何と言つても日本の博物館の不成熟な点だと思います。しかし、私は失望はしておりません。今後一歩一歩よくなっていくだろうと希望を持っておりますから。

五十嵐 郷土資料や自然科学資料の場合ですと、美術品の場合とまた違いまして、むしろ博物館自体の努力によっていいものを積み重ねて、コレクションを形成していくということがあると思いますが、その点についてはいかがでしょうか。

青木 自然科学関係の資料は、蝶のコレクションや貝のコレクションなど、個人のコレクターの方が大切にしている大変立派なものがあります。個人的に集めたとしても、大変いいコレクションができるわけですね。

それから、科学史関係では、日本の代表的な科学者のマニスクリプトといえますか、手紙、ノート、原稿というようなものまで含めて保存していこうという動きがあります。このような資料は、個人の方がお持ちになつて

いてもあまり価値がない。美術品などと比較しても市場性というものがありません。しかし、それを博物館が保存しておきますと、科学史の研究という立場から非常に利用価値が高いわけです。これは国立に限らず公立、私立の博物館でも同様ですが、そのような科学史資料的なものを残すということも、我々の分野の博物館にとって、重要なことだと思います。

下津谷 郷土資料関係から申しますと、例えば大正末期から昭和の初年にかけて、至るところで郡史の編纂が盛んだった時期がありました。大体、郡の教育界が中心になって編さんしまして、中には二千ページを超えるような立派な本がたくさんあります。

その郡史の中に出てくる基本的な生資料は、ある時期までには必ずどこかにあったはずなのですが、現在ではほとんどなくなっている。我々は郡史を一つの基本資料として扱うことが多いのですが、その元となる資料がないということは非常に残念なことです。やはり愚痴になってしましますが、その当時に施設があつて、とにかく管理をする人がいてくれれば、今一番必要な資料が使える状態に

あったと思うのですが、非常に残念に感じています。

青木 私も大学の先生などによく言うのですが、先生が大学を退官されるときに、資料を研究室に残してきてもだめです。後任の人がその資料をどう扱うかわかりません。専攻分野が全然違う方がみえたりすると、どこか倉庫の片すみに追いやられて、そのうちに散失してしまふ。

その点博物館の一つの特徴は、仕事の継続性ですから、資料を保存し、それを仮に現在の担当者がいなくなっても、次代に伝えていくという役割を持っておりますので、散失する恐れはありません。

五十嵐 私ども行政の立場としても、県や市が美術館 あるいは博物館をおつくりになりたいという場合には、まず事前の周到な準備と、ある程度のコレクションを集めること。それから開館したあとも継続的、系統的に集める努力と、その財政的な裏付けというものが必要で、うまくいきませんよということを申し上げています。開館した当初は、もの珍しさも手伝って利用者の方々が集まるでしょうが、そこに継続的な収集の努力がな

ければ、もうお客さんは来なくなるのだということですが。

嘉門 そのような点では、公立の場合ですとつくったときの知事さんなり市長さんは、非常に熱心におやりになりますが、その人が選挙に敗れて別の人が来ると、意識的に前の人が力を入れていたものを逆に押えるということもある。ですから、公立の場合には政治といいますが、行政がらみになりますのでどうしても弱い面があるようです。

五十嵐 それでも、ある程度住民の方たちが利用するようになれば、自治体の首長がかわろうと、それは必然的に育てていかなければならない、というような体制、気運になると思うのですが。

下津谷 確かに、自分の代につくったという、記念物としての博物館という考え方がまだありますね。ですから代がかわればやめないうまでも、とにかく少しわきへ置いてしまふ。それで自分はまた別のものを考える、という面がどうしてもあるのではないのでしょうか。

それからもう一つ、公立の弱い点は、学芸員などを採用しても、それが十分に育たないうちに人事異動でどこかへ回されてしまふと

いうことがあります。特に同じ県内にいくつか施設があった場合、三、四年程度で転々と異動させる例もあるのです。

青木 一番心配なことは、博物館設立の際には準備委員会のようなものがつくられて、当然計画の推進役は準備室の職員が担当することになります。しかし、その方々は開館のときにはほとんどいなくなっている事例もみられます。ですから、準備段階の経緯というようなことを、あまり知らない方々が運営に当たっていくということがよくありますね。

五十嵐 本当は、やはりまずヘッドにどっしりした人を置いてから、準備委員会や次の段階にだんだん移行させていく、というのが理想なのではないか。

嘉門 それから文部省の指導としては、公立のたとえどんな種類の博物館にしろ、その規模によって専門の学芸員は何名以上いるのが望ましい、ということをおっしゃると思います。ところが、それにあまりにも拘泥してしまふということがあるようです。その点、私立はどうせやり繰りしますのです、余りそのようなことはないのですが、その枠に全部あてはめようとすると、かなり問題も出てくるの

ではないでしょうか。

五十嵐 どのような調査研究をするのか、あるいは博物館の規模によって、また、どのようなものを重視するかということで、やはり少し分違ってくると思います。ですから、そのような意味では一律の数値を決めていくのはなかなか難しいですね。

下津谷 殊に、地方の博物館などの場合、スタッフが十分におりませんし、資料を丹念に収集して、さらにきちんと整理分類するということになりますと、大変な作業量になるのでなかなかできにくいし、その上他人には見えない努力です。それよりも、少し面白い展覧会を企画して開催していたほうが、あそこはよくやっているという評価を得られる。それで結局は、博物館本来の仕事というものが、十分に行えないということになってしまふ。

博物館相互間の資料の交流

五十嵐 博物館は、やはりある程度の利用

者が集まってこない、その存在理由が問われることになるのです。そこである程度人を博物館に呼ぶには、一年経っても内容が同じであったというのではだめなので、先ほど来からのお話のように、博物館自体がコレクションの厚みをつけていかなければなりません。しかし、全部の博物館がすぐにコレクションを充実するわけにもいきませんので、そのようなことから博物館相互の資料を交流するということもやっているわけです。これはなかなか難しいことと思うのですが、その点はいかがでしょうか。

嘉門 実はこのようにあらゆる種類の博物館がたくさんでききますと、交流ということとが一番大きな問題になってきますね。結局、一種の特別展の形をとりますので、そうすると日本人の習慣からして、春・秋のいい時期に特別展が集中してしまふ。

私のところの実例を申しまして、例えば秋になりますと、いろいろな美術館、博物館から、おたくのこのようなものを貸してくださいと申し込みが殺到します。私どもは常設館ですから、それに全部応じようとはしますと、秋の期間中は閉館しなければならな

とになってしまう。(笑い)これは、我々自身が考えなければいけないことですが、例えば国立を中心にしてグループ分けするとか、その中で調整・指導しながら進めていくようにしなければ、なかなかうまくいかないのではないかと思います。事実、あらゆる意味において、交流しなければ成り立ちませんし、それはとても大事なことです。

千地 資料の交流というものには、二つの形態が考えられます。それは、個々の館が持っている資料を交換するというやり方が一つと、もう一つは貸し借りで行うということです。確かに嘉門先生がおっしゃったように、美術館の場合は貸し借りが主体で、それが激しいためにいろいろな問題が出てくるのです。自然史博物館の場合ですと、美術館ほどには貸し借りが多くありません。自然史博物館は、大抵常設展を主体にしてやっておりますから。特に、私のところは展示しているものは原則的には貸さないことにしています。ただし、展示していない資料で貸出し可能なものは貸出ししようということです。

それから、自然史関係の資料の交流というのは貸借が主体ではなく、むしろ交換が主体

ですね。例えば、植物の標本を野外へ出て採集した場合には、一つだけ採集してくるのではなく、デュープリケット——同じものを必ず採集してきまして、それを交換用にするというやり方です。これは、自分のところの資料を増やしていけるといふ利点があります。青木 私館でも同様ないくつかの例があります。今、千地先生からお話があったような事例も現にありますし、もう一つには、タイプ標本というものがあります、これは、自分のところにはないようなものを、レプリカを作ってよそに差し上げることです。

それから、私どもの理工学の資料の場合には最近、意識的に貸出し用のセットを作っておりまして、例えばレオナルド・ダ・ビンチの模型が五二点ほどあるのですが、これを絶えず貸出せる態勢にしています。

また、昔の真空管などをたくさん集めておられますので、これをどこかへ差し上げるということも実は可能です。たまたま真空管のこともあり、完全な登録資料、つまり備品として受け入れてないので、そのようなものについては、博物館のためには差し上げること

もできます。

嘉門 私どもでは、今年の春に、「ひろしま美術館」との完全交換展というものを、一つの試みとしてやってみました。同じ点数を同じ期間中、完全に入れ替える方式だったのですが、大変皆さん方に喜んでいただきました。そのようなやり方も一つの方法としてあるのではないかと思います。これは、海外でもバチカン美術館とオランダのアムステルダム美術館との例がありまして、実は、そこからヒントを得て試みてみたわけです。

レプリカ活用の功と罪

五十嵐 このへんで資料展示の話題にも少々触れたいと思います。先ほどもレプリカのお話が出ておりましたが、最近レプリカや二次資料の活用ということが、非常に進んでおります。そこで実物資料と二次資料の組み合わせといいますか、どのような場合にどちらの資料を使うかということについて、青木先生のお考えはいかがですか。

現在は、模型でも何でもレプリカと一言で片づけているのですが、模型と複製は違うものです。自然史の場合ですと、いわゆる複製というのは、あるものから型取りをして、形態的にはオリジナルと寸分違わないものにするので、形態上の研究はそれで可能なものというわけです。そして、それ以外のものは模型というように使いわけています。

いずれにしても、最近では、模型なり複製なりが、わりあい精巧に、簡単にできます。そのために、博物館の展示が、大変やりやすくなったという面があります。ですから、博物館をつくるときに、本物の資料が余りない状態でも、そのようなものを活用することによって、うまく見せることができるわけですね。しかし、これはレプリカの技術的な発達による功の事例ですが、罪もあります。例えば、どこへ行っても同じような展示になってしまふということや、博物館を万国博やポートピアのパビリオンと同一視するような安易な考え方がはびこる恐れもあります。

嘉門 おっしゃる通りですね。美術の世界におきましても、学校教育などを念頭におい

て考えますと、レプリカは非常に大きな効果を持っています。例えば、ヨーロッパの大学では、その附属美術館に古代ギリシャ時代からの美術の模造品をずらっと並べていて、それを教育材料に使っている例があります。これは、教育的に非常に大きな意味を持っている。ですから、博物館活動の一つとして、これを自然科学、社会科学を問わず、博物館では力を入れるべきですね。ただ、それがどこへ行っても同じようなものになっては困るので、そのへんを一考する余地はあります。やはり、国立や公立が中心になってレプリカの活用について考えていただくとうりありがたいですね。

下津谷 最近では、レプリカの活用が盛んになったものですから、博物館に対するイメージが少し変わってきているのではないでしょう。私たちがもよその博物館に行きまして、いいものがあるなあと思ってよく見ますと、レプリカだったという例が少なからずありますね。それが度を過ぎてしまふと、今度は本物を見てもレプリカだと思ってしまう。(笑い)やはり、博物館というのは、特にことわっているもの以外は、全て本物を

青木 レプリカという概念は、自然史、美術、あるいは理工系とでは、やや違うだろう

と思います。我々の場合ですと、例えば車のエンジンを展示してそれを理解していただくとうとすると、ただ置いておくだけではなかなか観覧者の興味をひかないわけですね。ですから、それを動かしたり、あるいは一部分をカットしたりするのですが、そうするとカットしたものは、実物の保存資料として適さないという難点が出てきますが、やはりよりよく理解していただくためには、レプリカよりも原理的な動きをわかりやすく誇張した模型を作ったほうが、より効果的だと思います。そのような配慮は、特に理工系の場合に多いだろうと言えますね。

五十嵐 それともう一つは、従来は、展示物に触れてはいけないということがありましたが、最近ではむしろ積極的に触れさせることによって、博物館をより身近なものにする、より理解を深めるという効果があると思いますね。

千地 レプリカと一言で言いますが、今後はもう少し用語を統一していく必要があるのではないかと感じを持っています。

展示することが一番基本的な姿勢だろうと言いたいです。それが、最近では往々にして、守られないことも少なくありません。このへんが少し問題でもありますね。

機械利用と展示の工夫

五十嵐 レプリカの話とも多少関連があるのですが、最近の博物館の新しい傾向としては、視聴覚教育的な手段、特にビデオ等の活用が盛んになってきているわけです。例えば、大阪にある国立民族学博物館などは、それを系統的に活用した最初の例だと思のですが、このような傾向については、先生方がお考えでしょうか。

嘉門 ビデオ等を活用することによって、よりよくわからせることができますし、より親しめるという面があるので、私は視聴覚と博物館活動とは切り離せない。むしろ絶対に必要なものだと思っています。

青木 ただ、それをどのように利用するかという問題がありますね。従来、博物館をつ

くるときには、ともすると展示屋さんに丸が
かえて請け負わせてしまう傾向がありました。
しかし、展示屋さんというのは、万国博
の展示でもやるような気持で考えてしまいま
す。先ほども博物館は実物がメインである
というお話が出ておりますが、ディスプレイを
考える人たちには、そのような意識が薄いよ
うにも受けとれます。ですから、実物が第一
だということを忘れて、どのような展示方法
ならば見ばえがするかという観点から入って
しまいます。それが視聴覚のビデオであり、
マルチスクリーンであるという形が先になっ
てしまう結果を生む。これは、非常に危険で
はないかという感じがしますね。

千地 視聴覚機器というのは、あくまでも
博物館に展示してある資料の理解を助けるも
の、つまり、補助的な手段です。それが主客
転倒している場合が往々にしてある。

下津谷 視聴覚手段の導入といっても、経
済力の弱い小さな館では、もっと安いものが
ほしい。今のようなビデオですと、それを一
本作るのには大変な金がかかります。そうし
ますと、いいことはわかっていても使えな
い、ということになってしまいます。

千地 視聴覚手段の活用のみならず、資料
の収集・保管の分野に機械力を導入する必要
も出てくるのではないでしょうか。例えば、
資料に関する情報をコンピュータで整理し
て、人手、時間があまりかからない、しかも
実用的なやり方を今後開発していかなければ
ならないのではないかと……。

青木 私もそう思いますね。そのような資
料管理の機械化の検討が、博物館の内部でも
なされるべきだと思います。

嘉門 私は、そのようなことのためにも、
やはり資料センターといいますが、情報セン
ターの的なものを国の方でつくっていただき
たいと考えていますが、現在のように、マイク
ロフィルムのシステムやコンピュータのネ
ットワークが発達してきましたと、この美術
館へ行っても、持っている絵画の系統が同じ
ようなものであるとか、さらに類似のものを
無理して買う必要性はなくなるのではない
か。どこに何があって、どのように保管され
ているかというデーターが即座に検索できる
態勢にあるとすれば、研究面での活用を含め
て、大いに役立つのではないかと思います
ね。

青木 やはり、そのような観点が必要で
す。それに加えて、国の施設は何をなすべき
か、公立の施設、私立の施設はどうあるべき
かということについて、もう少し整理されて
いてもいいのではないのでしょうか。

博物館活動と学芸員の役割

五十嵐 博物館の活動には、今まで話し合
われたことのほかにも、いろいろな活動があ
りますが、その一つには、学校教育との関連
があげられると思います。その点、小中学校
における博物館利用事例集などをお作りにな
って、活発な活動を展開されている千葉県の
状況について、下津谷先生から紹介してい
ただけませんか。

下津谷 私は、この事例集を読んでみて、
一つのやり方として非常に興味深いと思いま
した。例えば、子どもの作文などが載ってお
ります。これは博物館へ行って、いろいろな
学習をした後に書いたものですが、そこでは、
博物館の学芸員の先生方はよく勉強して

いて、言っていることは全て正しいという受
け取り方をしている。学校の先生が同じよう
なことを言っても、なかなかそうは受け取っ
てもらえない。それは、実物に即した博物館
活動の、子どもに与える印象が非常に強い
ということですね。

千葉県の場合、現在、県立博物館が六施設
ありますので、それぞれの施設で学校に対す
る学習の場の提供や資料の提供、あるいは学
芸員を派遣していろいろな研究会に協力す
る、というようなことを行っております。こ
れも、博物館の一つの在り方です。

嘉門 やはり、博物館は、従来のように、
資料を展示してあるので見に来たい人はどう
ぞ、というようなやり方では対応できなくな
ってきている。むしろ、博物館が積極的に外
に出て、行動するということが求められてい
る。それぞれの博物館の性格、方法によって
違いはありましようが、学校教育に限らず、
社会教育の分野にも、積極的になって出てい
くという姿勢が必要ですね。とにかく、日常
的に活動することが最も大事なことではない
かと感じております。

千地 私のところでは、面白い博物館の使

い方が増えてきました。と申しますのは、学
校の先生が博物館に来られまして、うちの学
芸員といういろいろ相談いたします。その上
でワークブックを作るわけです。それを私のこ
ろの普及センターで預かっておりまして、生
徒が夏休み中に博物館へ来て、展示を見なが
ら答を記入していく。全部終わったら再びセン
ターに返しておくという方式です。このよう
なやり方ではじめましたところ、徐々に普及し
てきまして、現在では一〇校ほどが実施して
います。

下津谷 それは面白いですね。私のところ
では、博物館の資料、展示が利用できる学習
の時には、先生方にまず博物館で学び、研究
してもらう。それを教室で展開し、最後に生
徒の博物館見学を実施しましたが、生徒たち
は非常に興味を持ちましたね。

青木 私のところでは、直接的、組織的に
学校を動員するということは、あまりできま
せんので、先生方に資料をお渡ししたり、普
及担当の職員と学校の先生が事前に話し合っ
て、先生方の手でワークブックなどを作った
りということをやっているようです。

五十嵐 ただ今のお話にも、学芸員の役割

は大きいということが出されていたと思いま
すが、この点について千地先生、いかがでし
ょうか。

千地 確かに、学芸員の役割は大きいです
ね。それに、学芸員がきちんと調査研究活動
をしなければ、展示は少しも良くなってい
かないという基本的な問題があります。です
から、博物館は研究所ではありませんが、学
芸員が資料に関する調査研究を行っていかな
ければいけない。その点を設置者側もよく理
解する。つまり、博物館の展示にしろ、普及
活動にしろ、学芸員の研究活動に支えられて
いるということを、もっと理解していく必要
があるということです。

青木 最近では、総合的な博物館が増加し
ております。歴史、自然史、さらには地域
の産業技術的な面を総合化した施設が現に
あるわけですが、この種の博物館には理工学
系の学芸員もいます。その人たちを見て、大
変お気の毒だなと思います。学芸員の能力
評価の実態は、どうしても、何か書き物に
した人、言い換えれば研究論文を書いた人
が評価されるという慣習があります。

こう言っでは語弊があるのですが、自然史

の関係で言えば、「○○のこん虫というテーマで論文の一つも書けるのですが、理工系の場合に「××の電気事情」などと書いても、学会で発表する場がありませんね。（笑い）そのような点で理工系の学芸員は、発表する場を与えられていないというハンディを背負っている。ですから、学芸員の能力評価の場合には、これこれの展示を担当したということとを評価基準にしていただと、理工系の学芸員の能力というのは、かなり高い評価を得られると思いますね。

嘉門 美術館の立場から申し上げますと、今日の一般の美術館の情勢、つまり特別展を中心に運営して行く限り、本来の意味で学芸員が調査研究をする暇はないのではないかと。また、学芸員の資格取得に必要な博物館実習というものがありません。美術館に関する限り、学生の博物館実習を受け入れてくださる博物館をさがすのに苦労しているのが現状です。

それから、美術関係の場合ですと、大学の先生になることよりも、博物館の学芸員になることのほうが、どうしても一段下だということの方が抜け切っておりません。

長さんなどに、そのことを大いに望みたいですね。

干地 今後は、博物館の数よりも質を問う時代になると思います。質のレベルアップは、学芸員に負うところが大きいわけですから、学芸員の雑用をできるだけ軽減すること。学芸員本来の学芸活動に主体が置かれるようにしなければいけないのではないかと思います。

一例を申し上げますと、国立を除いては、美術品の修復をしたり、標本を作ったりする技術屋さんをかかえている博物館はありません。そのようなことから、学芸員に過重な負担を強いっているくらいがあるのではないかと。雑用に追われて研究活動や普及活動ができない。そこから解放するためには、サポートスタッフを充実して、学芸員が展示、研究活動等に専念できる環境を作りあげなければならぬ。このような技術スタッフは、外国の博物館に行くことと必ず置いている職種なのですが、現在の日本にはそれが欠けておりますね。

嘉門 今のお話には同感です。学芸員本来の活動に専念させるための態勢づくりは、大

それらのことが重なって、現在のように各種の博物館が増加すると、一番不足してくるのは中堅の学芸員だと言えます。どここの美術館でもそこが悩みのたねになっていて、どうしても少ない人数で無理をすることになってしまふ。そのような意味で、学芸員の養成・確保は、非常に大きな問題ではないかと考えております。

五十嵐 やはりこの問題は結局、先輩がよき後輩を育てていくということ、あるいは現職教育や研修を通じて、ねばり強く行っていくほかありませんね。

下津谷 ですから、先ほども話に出ましたが、学芸員で入ってそのまま育って行くという体制が確立されておられませんので、結局どこかへ転々と動かなければ、ポストが上がっていかない。そのような点を改善しなければ、よい学芸員は育たないと言えますね。

博物館の今後を展望して

五十嵐 今までのお話しの中にも、今後の

事なことです。そのほかには、やはり情報・資料センターというものを媒体にして、各博物館同士が情報交換というものを、もう少し積極的にすべきだということ。さらには、繰返し申し上げますけれど、博物館が社会なり学校へ、積極的にうって出るという姿勢が重要ではないか。

要約して申し上げますと、以上の三点になります。

青木 自然史系の博物館は、とにかく少なくて、全体の博物館数の一割にも満たないわけですね。まして理工系になるとさらに少ない現状です。今後はこの分野の博物館も増えてくるだろうと思うのですが、その場合に私自身今まで少々こだわりがありました。それはヨーロッパの博物館の中でも、ナチュラヒストリー・ミュージアムとサイエンス・ミュージアムは、違った道をたどってきたわけです。ですから、日本の場合にも、サイエンス・ミュージアムのものができていいのではないかと、というように考えていたのですが、どうもそうではなく、日本的な科学博物館というものができていいだろうと考えるようになってきました。そのような点では、総合的

博物館はどうあるべきか、ということが含まれておりました。例えば、情報センター的なものの必要性であるとか、国と地方公共団体、あるいは私立の博物館相互の役割をもっと明確にするということや、せっかくつくった博物館の建物にふさわしい中身にするための努力を重ねる、ということについてお話を伺ったわけです。

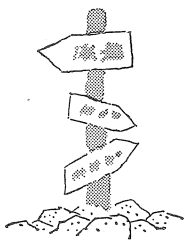
ここでもう一度、今までの話し合いを踏まえまして、今後の博物館に対する希望、あるいはご注文を先生方のほうから、一言ずつお願いしたいと思います。

下津谷 博物館は、世間一般から非常に誤解を受けている面がある。それは、開館すると最後であるという認識です。そうではなく、博物館は、将来何百年もかけてつくりあげていくものです。先ほどの話にも出たように、博物館建設を決断し、推進した首長がいなくなると、今度は冷遇されるというような感じ方も、やはり博物館に対する基本的な考え方がないから、そのように感じるわけです。ですから、長い時間をかけてつくりあげていくという態度を望みたい。殊に、これからつくり出すところでは、その地方の首

な博物館ができつつありますから、その中にもう少し理工学的な分野を取り入れた博物館が増えていけば、その中から日本的な科学博物館が生まれてくるのではないかと、という希望を持つようになってきているわけです。

五十嵐 今、先生方からは、厳しいご注文もいただいたわけですが、このご要望をこなしながら、日本の博物館活動がさらに充実・発展し、一日も早く欧米のように厚みのあるものになることを期待したいと思っていますし、また、日本独自の発展の道も見えつつあるわけですから、ぜひその方向に向かって進んでいただきたいと思っております。

本日は、大変ありがとうございました。



次 号 目 次

特集 常用漢字表と国語

話しことばと書きことば

遠藤 慎吾

座談会

常用漢字表をめぐる

(出席者) 三根谷 徹・林 大

渡部 昇一・山本雄二郎

(司会) 室屋 晃

国語の表記と漢字

阪倉 篤義

今後の国語はどうあるべきか

外山滋比古

国語教育と漢字

瀬戸 仁

解説

常用漢字表について

文化庁文化部国語課

常用漢字表に基づく

小・中・高等学校の漢字指導

初等中等教育局小学校教育課

編 集 後 記

▽「博物館」のイメージ、と言われたとき、いったい幾つぐらいを思い浮かべることができようか。

文部省では、ほぼ三年に一回、「社会教育調査」を実施しており、ここでは博物館を総合、科学、歴史、美術、野外の各博物館と動物園、植物園、動物園、水族館との合計九種類に分類しています。

▽数が多いのは歴史、美術の両博物館ですが、逆に少ないのは野外博物館四、動物園一〇となっています。

野外博物館とは、戸外の自然の景観及び形態を、また動物園とは動物・植物をそれぞれ育成してその生態を展示するものをいいます。国立科学博物館付属自然教育園(東京)、川崎市立民家園(神奈川)などは前者の例であり、また、信州大学教育学部付属志賀自然教育研究施設(志賀高原)は後者の例です。

▽国立の博物館の大部分は当然ながら文部省所管のもの(大半は国立大学の付属施設)ですが、他省庁所管のものには通信博物館と労働省産業安全研究所付属産業安全技術館とがあります。博物館特集を機に数少ない博物館の一端を記してみました。(企画室)

MEJ

61

月刊

「文部時報」

10 月 号

第1253号

文 部 省

昭和56年10月5日 印刷
昭和56年10月10日 発行

著作権
所 有

発行所 株式会社ぎょうせい

定価 250円 (〒50円)

本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)

年間購読料 3000円 (〒共)

電話 東京 (268) 2141 (代表)
振替口座 東京9-161番
印刷所 株式会社行政学会印刷所

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店をお願いします